



連れられて行く洛北の山ふかく時雨降  
りいでてころぼそさよ

くろぐろと杉の立木の文目あやめなく夜道ど  
こまで北へひたすら

ぬばたまの暗き林道を抜けゆくと貴船  
の字ふと見えて擦過す

定めなきしぐれを衝きてくらがりの花  
背を越えて美山みやまへくだる

夜おそく着きたる宿に招じらる洛北の  
京ことば柔らに



## ふるさとコレクション——166

### 御影石（兵庫県神戸市）

岩石としての分類では「花崗岩」であるが、石材として「御影石」と称され、墓石などに広く使用されている。名前の由来となった御影は神戸市東灘区にある地名のひとつで、旧兵庫県武庫郡御影町の一帯を指す。澤之井という泉があり、神功皇后がその水面に御姿を映し出したことが「御影」という名前の起源とされている。

硬く、風化に強く、重さもあり、他の石に比べて吸水率も低いという特徴がある。東灘区で御影石の産出が始まった正確な時期は不明だが、古くから荒神山（現在の住吉台）で採れた石は高品質と評判で、採掘量は享保年間（1716～36年）に全盛期を迎えた。

住吉川上流の石切場から持ち出した石を全国に送る際、御影浜から船に載せたため「御影石」の名が付いた。耐久性に優れた「丈夫な石」の特徴を活かし、古くから道標や石の鳥居、石垣などに使われてきた。1956年に六甲山が国立公園の一部になり採掘ができなくなったが、六甲山系の御影石は「本御影石」と呼ばれ高級品として名高い。御影の名称は各地の産地にも転用されている。

（写真・解説 山崎 洋子）

#### 口絵鑑賞 感情の変化を描く

「花背峠越え」14首は宿に到着までの道中、食事、その後と大まかに3部分に分かれ、一連は冒頭の5首。

花背峠は京都市の北東、左京区の国道477号上に位置するが、まったくの山の中で掲出歌一連は夜の峠越えなのでかなり暗く、本当に不安だったと思われる。

1首目「連れられて行く」から、おそらく本人の知らない場所へ行くようで少し不安、がそこに「山ふかく時雨降り」と不安要素が加わり、結句「ころぼそさよ」につながる。

2首目、上句で暗さを表現し、下句のことば選びによってころぼそさに拍車がかかり、読み手も一緒に緊張する。

3首目「ぬばたまの」の初句に暗さを予感させるが「林道を抜け」字が見えた。人は集落を見るとホッとす。「擦過す」からちらりと見えたただだと推察されるが、この1首で気持ちの変化がわかる。

4首目「くらがりの花背」とひとことで表現し、それを越えての安心感が広がる。

5首目、ようやく到着した宿で気持ちのほぐれたことが結句の「京ことば柔ら」で感じさせる。

一連から道中の感情の変化が見事に伝わってくる。

(写真・木畑 紀子 鑑賞・小沢 博子)